

## 渡辺定元\* 天草のコラン・スルガランについて (一)

Sadamoto WATANABE\* : Notes on *Cymbidium koran* MAKINO  
and *C. ensifolium* SWARTZ in the Amakusa Islands,  
Kumamoto Prefecture, Kyushu. (1)

江戸時代よりわが国の暖地で栽培されている東洋ランにコラン、スルガランがある。コランはこれまで産地、分布が明らかでなく、スルガランは中国の福建省およびその周辺が産地とされている植物である。特に、コランは、*Cymbidium koran* MAKINO の学名が与えられ、<sup>注1)</sup> 園芸界では天草コランなど産地名を付して培養されているにもかかわらず、1971年、前川文夫博士の「原色日本のラン」に初めて学術的に認められる記載があるものの、<sup>注2)</sup> 前川博士の記載を引用した大井次郎博士の日本植物誌補遺 <sup>注3)</sup> とともに産地については断定していない。また、Index Kewensis には載せられていないという。<sup>注4)</sup>

スルガランは、コランより一般的に西南日本で栽培されている。この品種の多くは、古くより中国から輸入されたものとされ、近年長崎県松浦地方で採集されて西海ランと呼ばれるスルガラン <sup>注5)</sup> についても、土地の人々は和冠によってもたらされ、逸出帰化したも



写真1 熊本県天草町福連木角岳産のコラン (*Cymbidium koran*) , 1973. 9. 3撮影、採集後8年目、吉田穂積氏培養のもの。

\* 東京都文京区大塚4-18-2-402 4-18-2, Ohtsuka, Bunkyo-Ku, Tokyo.



写真2 佐賀県伊万里市東山代町菖蒲谷産のコラン (*Cymbidium koran*), 1975. 9  
撮影, 採集後10年目, 藤満久良氏培養のもの。

のではないかと考えている。

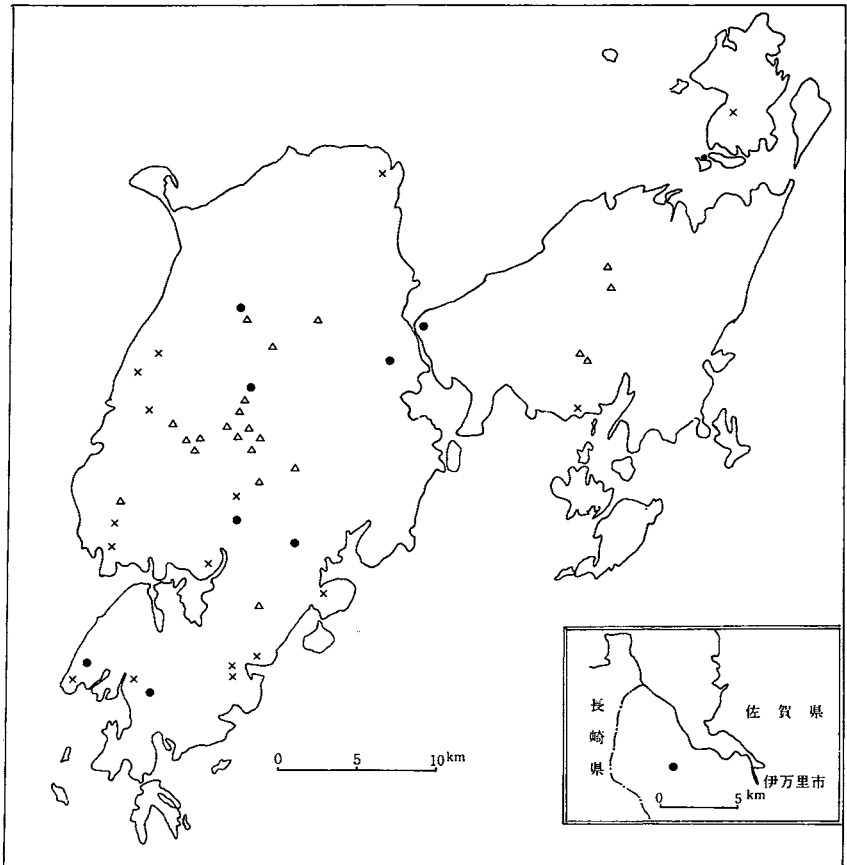
筆者は、1973年より熊本県天草島等でコラン自生地の調査を行い、コランの自生を確認するとともに、自生スルガランの多くの個体に接することができた。ここにその所見を報告する。

### 1. コラン・スルガランの分布

熊本県天草島は北緯32度10分～38分、東経129度58分～130度30分に位置し、天草上島、下島、大矢野島および周辺の多数の小島よりなる。特に下島は東支那海に面し対島海流のため気候温暖で、シイノキ、カシ類を主体とした照葉樹林によって覆われている。また、下島は、1960年代まで天然林が多く残り、明治、大正、昭和初期にかけての蘭ブームにもとり残され、九州（屋久、奄美を除く。）のうちで最近までいわゆる東洋ランの自然相が残された地域である。天草島に自生が確認されている *Cymbidium* 属は、シュンラン、カンラン、コラン、スルガラン、ナギランの5種である。このうち、シュンランは全域に分布し、ナギランは主として海岸線に近い照葉樹林に生じている。

筆者の確認したコラン、スルガラン、カンランの産地を、第1図、第2図および下記にしめす。なお、コランは、佐賀県伊万里市においても採集されている。

コラン ; 熊本県: 天草郡, 天草町福連木, 角岳国有林, 標高 Ca. 400 m (吉田穂積, 1965年採集), 苓北町, 木場, 柱岳, 標高 Ca 480 m (山本元治, 1952年採集), 河



第1図 天草島におけるコラン (*Cymbidium koran* ●), スルガラン (*C. ensifolium* ×), カンラン (*C. kanran* △) の分布と伊万里市におけるコランの産地。

浦町益田, 標高 Ca. 70 m (原田順一, 1970年採集), 河浦町阿津木峠, 標高 130 m (末次正高, 1967年採集), 牛深市魚貫, 久貫山標高 230 m (佐々木 某 1969年10月採集), 魚貫, 権現山山麓 (稲田徳平, 1963年9月採集), 本渡市瀬戸, 標高20m, (富永八州男, 1968年採集), 上記の他天草郡五和町, 天草町福連木, 牛深市亀浦にて最近採集報告あるも確認していない。

佐賀県: 伊万里市東山代町, 菖蒲谷, 標高 Ca. 400m (藤満久良, 1965年6月採集)。  
スルガラン ; 熊本県天草郡天草町松の平標高 Ca. 280 m (富永 孝, 1966年採集), 下田北標高 Ca. 100 m (原田謹一郎, 1973年採集), 下島黒勘根標高 Ca. 140 m (石田 明, 1971年採集), 下島首越峠 (柳田利吉, 1971年採集), 河浦町釜, 権現山標高 Ca. 110 m (竹林時義採集), 宮野河内本郷女岳標高 Ca. 20m (矢田九市, 1973年



係をしめしたものである。天草島は海岸からの最遠距離約10km、標高は、下島の角岳526m、天竺538m、上島の老嶽586m、倉岳582mが高い地域となっている。

## 2. 分布に関する2, 3の考察

### (1) コランの分布について

天草のコランの産地は、採集例からみて決して多くないが、下島を中心に海岸近くから、天草で最も山深く熊本細川藩の留山として一般の立入りが禁止され天然林が最近まで残存している角岳まで及んでいる。このうち特に角岳の採集例は、コランの史前帰化説を排除し天草自生を確認する意味で重要と考える。なお、角岳を中心に2, 3の採集例は上記の他にある。また、コランは天草コランと呼ばれるごとく江戸時代より採集されたものと考えられ、園芸品狭葉ケイランとして名高い銘品“天草”は、明治23年本渡市亀場の照葉樹林から採集されたものといひ、また、明治時代大量のコランが牛深市魚貫権現山で採集され東京方面に送られたという。<sup>註6)</sup>

東洋蘭園芸書等によるとコランの産地について中国、台湾、琉球、朝鮮を掲げている。しかし、ケイラン銘品のなかにこれらの地方の産とするものは見当たらない。蘭やしなひ草(幽香亭、1825年(文政8年))には、「小蘭草島の中より能伸て肥たる品なし」として、よき銘品ないとしても、中国渡来であるならば何等かの産地が記録されてもよいであろうが文献には見当たらない。また、戦後台湾より多くの蘭が輸入されているが、コランに相当するものは見られない。コランは非常に変化に富み縞柄などもいわゆる大ばけするので園芸的価値高く、中国、台湾産があれば輸入されても不思議でないが、それが報告は聞いていない。朝倉文夫氏は、朝鮮小蘭は濟州島の産としている。<sup>註7)</sup> 濟州島はカンランが産するといわれ、気候的に生育できると考えられるので今後の調査をまちたい。また、古今要覧稿所説によれば「和漢蘭稱」云、小蘭は蘭花の類にして葉は狭短、夏の末、秋のはじめに花を開く、白色にして紅の筋あり。琉球の産也。」として琉球産としている<sup>註8)</sup>が、これも最近の報告なく不明である。

以上のことから、コランは現在までのところ、熊本県天草地方、佐賀県松浦地方に自生するとするのが妥当である。

### (2) スルガランの分布について

スルガランは、オラン、メラン、ジランなどと呼ばれ、中国福建省などの産とされ、これまでわが国の自生は認められていないのが通説となっている。また、長崎県松浦地方に自生する西海ランについても、逸出帰化説が一般的である。しかし、草木図説草部 卷18 スルガランの項の書出しは「蘭ノ種類甚ダ多シ、本邦所産ノ者ハ建蘭漳蘭小ラン寒ラン、等ニシテソノ各品又種類多シ、云々」として、スルガランが、わが国にも産することを認めている。草木図説にはスルガラン、コランの他、ギョクチンラン、ソシンラン、ヤキバラ、シマラン、ホウサイラン、ハクラン、キンリョウヘン、ハウラン、ホクロ等の種類を掲げているので、スルガラン、コランをわが国に産するとしたのは、中国輸入ランの種類が何んであるかを知ったうえでの記載とみてよいだろう。

スルガランは、天草地方では古くから採集例が多く、毎年何個体かの報告が寄せられている。また、個体変異も高く、赤芽、青芽、光沢の強弱、柄物などに地域、個体ごとに特色がある。海岸よりそう遠くない暖かい照葉樹林に生育する。筆者は、スルガランの自生北限の温度的な分布限界は、温量指数 140 度付近で、冬の気温が長時間にわたり零度以下にならない地域と考えている。天草の海岸部はこの条件にあてはまり、また、長崎県松浦地方海岸部もこの領域にある。なお、江戸時代に多量に栽培された静岡地方は、気候温暖であるが、家屋の軒先でないとして越冬できないという。<sup>註9)</sup> 古い蘭書には紀州、四国等の産を報じているが、この地域の海岸部は温度的にみて温量指数 140℃、無霜地帯で自然の立地条件にかなっているとみてよいだろう。

### (3) コラン・スルガラン等の分布と地質条件

植物は、生育地の地質的選択の強い種とそうでないものがある。ラン科植物は、一般に生育地の水、光、土壌構造等の選択は厳しいが、割りあい地質的には厳しくない。しかし、地質的選択のない種であっても、分布限度に近づくと選択が顕著になるものもある。カンランは、分布の中心ともいうべき九州にあつては地質的選択は顕著でないが、他の地方では、特に第3紀頁岩、砂岩地帯を好むようである。カンラン東北限の静岡天竜・大井川地域もこの地質であり、また、文献上の北限千葉県も第3紀層である。西限である天草も大部分第3紀層であつて、紀州、四国のこの地質地帯は個体数が多い。

天草の第3紀層は、頁岩、砂岩が大部分をしめ、カンラン、シュンラン、コラン、スルガラン等の *Cymbidium* 属の生育に特に、適した地質と考える。特にシュンラン、カンランは個体変異が他の地方より大きく、色々の園芸的価値あるものがある。

コランは、アカメソシンに近い種類であるが、地理的に隔離、遺存、種形成を天草、松浦地方の第3紀頁岩、砂岩地帯でなしたものであると考えられる。また、スルガランは、福建省に分布の中心をもつ種であるが、気候的に生育できる条件をもち、地質的にスルガランの特に好む条件を持つ天草や松浦地方等に隔離しているとみるのが妥当と筆者は考える。温帯系植物のココメウツギの北限が日高山脈の輝緑岩地帯で、高山植物と同時に生育し、チャセンシダが石灰岩や蛇紋岩地帯に隔離し、北限界を形成しているのと同様なパターンと考えるからである。<sup>註10)</sup>

### 3. コラン・スルガラン和名考

コランに付けられた別称には、シマサキラン（飯沼慾齋「草木図説」1862年）、姫蘭（小原栄次郎「蘭華譜」1937年）、王小嬢（盆栽研究会「オモト及蘭栽培法」1911年、小原同上等）がある。このうち姫蘭、王小嬢は、その形姿からとつたものであろう。王小嬢は漢名であるが、どうしてこの名が付けられたのかは不明で、この名称からして中国産とするのは早計であらう。香、花色、葉変りの多数の品種からして中国産であれば古くよりシュンラン、ソシンランと共にわが国に知られていたであらう。シマサキランの名は、形姿説と地名説の二説が考えられる。形姿説として、野間守人氏は縞咲蘭としている。<sup>註11)</sup> しかし、筆者は縞先蘭が適切と考える。コランは、園芸上価値ある爪、覆輪の個体が多く、上

記の魚貫崎産は爪、魚貫崎権現山産は覆輪のものである。また、品種として白爪、中縞、三光等があり、これらは葉の先端又は上部が縞をつくる形姿を表現しているものだからである。しかし、この説の難点は、東洋蘭の多くの品種に縞先の葉柄物があり、コランのみどうして特別視する必要があるかである。

ケンラン、メラン等地名に由来した名は東洋ランには多いが、シマサキランの地名説は大胆な仮説が必要である。しかし、産地名を表わすならば、その説明は意義ある。シマサキランの地名説は、島崎蘭、島先蘭である。天草の魚貫地方は、これまでコランが相当多く採集されたところであるが、この地域は、江戸時代幕府の天領であった天草の中心地富岡城からみて島崎、島先にあたり、天草島の先端にあたる場所である。また、牛深港は、長崎—江戸回船の中継基地として栄えたが、ここより江戸、駿河地方にもたらされたコランは島崎ランの名で呼ばれるにふさわしい。そして、これが正しいとするならば、コランの天草自生に対する証しとなるであろう。

スルガランの別称は多くあるが、自生を裏付ける名称としてジランがある。ジランとは地蘭、自生する蘭、中国から入ってくる建蘭等に對置するため地元産する蘭の意味を持っている。スルガランがわが国に産する説を採るときこの名称は重視してよい。邦産スルガランは、古い蘭書には紀伊半島、四国南部、などに産する報告あり、天草、松浦地方で現在も自生が確認され、また、鹿児島県の海岸部でも稀に採集されるとの報を聞くとき、わが国で蘭の培養が盛んになった江戸時代中期（1700年以後）、中国から輸入された銘品に対してジランとして区別され、親しまれたものとする。（つづく）

#### 参 考 文 献

- 注1) 飯沼慾齋著、牧野富太郎再訂増補、増訂草木図説草部卷18（1913）等。
- 注2) 前川文夫、原色日本のラン Pl. 175, 1971。
- 注3) 大井次三郎、改訂増補新版日本植物誌、P 1447, 1975。
- 注4) 大井次三郎博士の私信による。
- 注5) 西海ランとは、長崎県北松浦郡吉井町の松瀬順一氏、世知原町陣野重一氏が松浦地方に産するジランに付けた名称である。西海ラン採集者の培養している個体は、筆者の観察のかぎりでは、小佐々町産の一例を除いて、田平町、平戸市産の個体はすべてスルガランであった。前川博士は、「原色日本のラン」で田平町産をスルガランとしている。
- 注6) 元高校教諭、天草蘭培養家、天草郡河浦町、石田 明氏による。
- 注7) 朝倉文夫 東洋蘭の作り方 1940年による。
- 注8) 小原栄次郎 蘭華譜 1937による。
- 注9) 杉本順一氏による。
- 注10) 渡辺定元、北海道日高・夕張山系における高山植物の植物地理学的研究、国立科博専報、(4): 95—126。
- 注11) 野間守人 蘭の巻 1926。